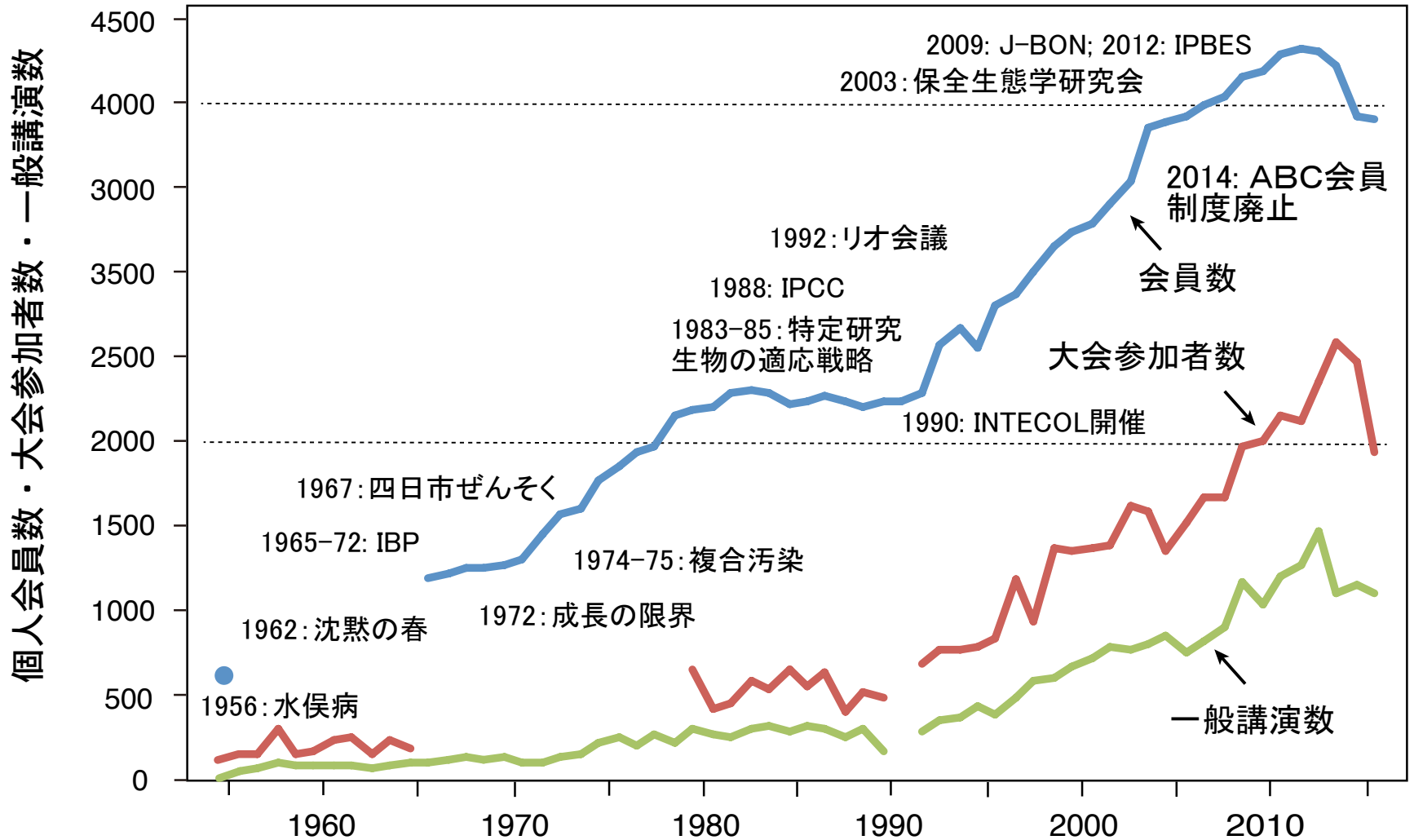


# 生態学会の将来について語る会 (総会第二部)



齊藤 隆  
(北海道大学フィールド科学センター)

# 学会員・大会参加者数の動向



## スライド2の注釈

1. 会員数会の動向は,(1)1970年代の第1次拡大期,(2)1980年代の第1次安定期,(3)1990年代の第2次拡大期に大別できる.2000年以降の動向を特徴づけるのは尚早である.
2. 第1次拡大期は公害問題,農薬問題などの社会問題に対応したものと思われる.
3. 第1次安定期の主要な研究課題は行動生態学だった.この時期に「基礎的なマクロ生物学を重視する」,「社会的には開発と対峙する」という日本生態学会の基本的性格が形成されたと思われる.
4. 第2次拡大期は地球環境問題に対応したものと思われる.応用研究が増えた.生物以外を研究対象にする会員が増えた.ミクロ生物学との融合も進んだ.

# 日本生態学会が抱える問題

参加者が 2,000名 を越える大会の運営は、「手弁当」による奉仕の限界を超えています。実行委員会や企画委員会のメンバーの方々には、ご自身の研究を棚上げして、学会のために働いていただいています。一部の会員の献身によって支えられている体制は、改めなくてはなりません。このままでは、献身的な会員が研究に費やす時間がいっそう少なくなり、日本の生態学は先細りになってしまいます。また、学会運営の基盤となる仕事を「奉仕」に頼っていると、個人的な事情によって（例えば、転勤など）支障が生じる心配があります。

## 改革を進めるために考える三つの要素

1. 学会・大会の魅力を高める.
2. 運営の負担を減らす.
3. 健全な予算構造の確立.

どのように3要素のバランスをとるのか？

# 学会大会運営改革の具体策

1. 会員管理・大会運営システムの外部委託.
2. 学会事務局の大会運営参画強化.
3. 予算構造の見直し.
4. 大会運営の簡素化.